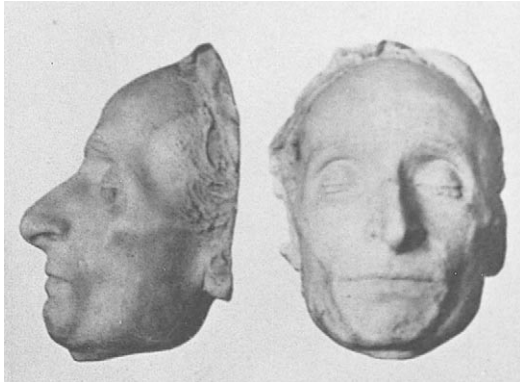


我が師、我が友、ブレイズ・パスカル —宗教多元化時代におけるアポロジ―構築を目指して—*

森 川 甫**



ブレイズ・パスカル デスマスク
ポール・ロワイヤル図書館所蔵

はじめに

パスカルの『パンセ』には、日常生活や社会、時代の状況を具体的イメージによって端的に表現し、人生の重要な、根本問題を提示する断章が随所にある。

若すぎても正しい判断ができない。歳を取り過ぎても同様である。

自分の作品を作りたてに検討したのでは、まだそれに全くとらわれている。

余りあとからでは、もうそこに入っていけない。

遠すぎるところから、あるいは、近すぎるところから、見た絵の場合も同様である。そして、真の場所は不可分の一点しかない。その他の点では、近すぎるか、遠すぎるか、高すぎるか、低すぎる。絵画の技術では、遠近法がそれを指

定する。

だが、真理や道徳においては、誰がそれを指定するのだろうか。(L. 21)

多すぎる、または、少なすぎるぶどう酒。

彼にぶどう酒をやらないでみたまえ。彼は真理を見いだせなくなる。

あまり多くても同様である。(L. 38)

I. 我が師、我が友、ブレイズ・パスカル

1) パスカル導かれて

数年の領有のうちに、基本的な法が変わる。(L. 60)

1945年8月、我が国の無条件降服により大太平洋戦争は終結した。敗戦後、アメリカ等連合国による占領の数年間で基本的な法律が変わった。主権在君の欽定憲法から主権在民の「平和憲法」に変わり、婦人参政権が一举に実現し、歴史上、類例をみない農地解放が行われた。

敗戦後の社会的、経済的混乱のなかで、新生日本の指導理念は、マルクス主義かキリスト教かと議論されていた。中学3年の頃からキリスト教に関心があったが、ある過失をおかした友人を慰めて周りの人は皆、「忘れてしまうように」と勧めていたが、訪れたある牧師はただ独り「事実を直視し、そこから出発しなさい」と諭された。私はこれこそ真実の勧めだと思った。「真理は少数者と共にある。」ということは、その後の人生で、幾度か実感したが、その最初の体験がこの時であった。私はその場で、「先生の教会に出席させていただけませんか」とお願いして、その教会に出席させたもらった。その牧師は、日本基督教改革派教会西代教会（現板宿教会）牧師、春名

*キーワード：パスカル、『プロヴァンシアル』と『パンセ』、アポロジ―

**関西学院大学社会学部教授

寿章先生で、春名純人教授の父上であった。春名寿章先生から『ウエストミンスター小教理問答』を学び、その首尾一貫した世界観に感銘を受け、洗礼を受けた。

高校生の頃から、聖書の教えを純粹に守り、迫害されている少数派を弁護し、やがて、キリスト教の弁護論（アポロジー）を執筆するパスカルにも共感を覚えるようになった。大学2年生の時、友人と *Pensées, Classique Larousse*（クラシック・ラルース版、『パンセ』抜粋）を読み通した。山中良知先生（元社会学部教授、社会学部長、当時、四国学院大学教授）はカルヴァン研究をライフ・ワークとするよう大学生の私に熱心に勧めて下さった。先生は後年、1977年6月3日、甲山山麓でジョギングの最中、天に召された。¹⁾

2) パスカルの研究の道程

私の最初の論文は、*Pascal - son idée de la foi dans le discours du pari*.（「賭けの議論におけるパスカルの信仰思想」卒業論文、文学士、大阪外国語大学）で、主として、『パンセ』断章L. 343により、賭けの議論における信仰について考察した。

修士論文、*Etude sur l'Histoire du Salut dans les Pensées de Pascal*.（1962, 修士論文、大阪大学）では、『パンセ』におけるキリスト教救済史を研究した。和田誠三郎教授は、博士論文執筆中で、ラフユマ版『パンセ』に基づいて、パスカルのアポロジー（キリスト教弁証論）を研究され、のちに、『パスカル「パンセ」研究序説』（青山社）として、公刊された。和田先生の文学博士学位取得によって、博士課程の開設が認可され、私は博士課程第1回生となった。原亨吉先生（当時、助教授）は、パスカルの数学的業績に関する論文を *Gallia* 誌（大阪大学文学部フランス語フランス文学会発行）に発表され、次いで、*Doctorat du 3^e cycle*（パリ大学、第3期課程博士）学位論文を提出された。パスカルの数学に関して、画期的な発見をされ、のちに、学士院賞。恩賜賞を受賞された。（パスカルの『パンセ』研究の前田

陽一東大教授も学士院賞を受けておられる。）赤木昭三教授（当時、助手）はパスカルの自然学に関して、パリ大学に論文を提出し、*Doctorat d'Université*（パリ大学博士）の学位を受けられた。戦後、パリ大学の教授は日本人に対して論文指導をなかなか引き受けてくれなかったが、諸先生、先輩がたのこうした努力、功績により、日本人留学生にも博士学位論文の指導を受ける道が、拓かれてきたのであった。

私は1963年、関西学院大学社会学部専任講師として就任し、関西学院大学社会学部教授会は寛大にも就任1年半で、海外留学を認めて下さった。1965年、坂本勝兵衛県知事が発案され、創設された兵庫県海外留学生として、フランスに派遣され、その翌年には、フランス政府給費留学生に採用された。アンリ・グイエ教授が指導教授を引き受けて下さり、論文題目は *L'histoire des Provin-*



パスカル 幼少時

ciales, et la pensée théologique de Blaise Pascal, des Port-Royalistes et des Jésuites.（『プロヴァンシアル』とブレズ・パスカル、ポール・ロワイヤル修道院、イエズス会の神学思想）となった。

1) 甲山を仰ぐ仁川ピクニック・センターの甲山橋（かぶとやまばし）わきに、高さ50cm位の「仰甲山之碑」が建っており、次のように刻まれている。「山辺に向いて 我目を挙ぐ 関西学院大学社会学部教授 山中良知先生 昭和五十二年六月三日 召天の地を記念して之を建つ」（『詩編』121；1）



最終講義2001年1月22日社会学部2号教室

予備試験の口頭試問は試験官、ジャン・ギットン教授 Prof. Jean Guittou, Académie Française. によって受け、博士論文提出候補者リストに載ることになった。(2000年度「教養演習, J. ギットン著『新しい思考術』*Nouvel Art de Penser*をテキストとして、使用した。同教授は驚きを感じる能力を考えるための第一条件として挙げ、ドマの描いたパスカルの似顔を例にして、その目を見ると瞳孔が開いていることを指摘しておられる。「超脱の印象によって人を畏れさせるものか」というエミール・ブートルーの見解に賛意を表し、「この超脱は、驚異による超脱であって、発見したり、尊敬したりする働きと同じものである。若い人たちに驚異する術を教えなくてはならないのはそのためであり、私の考えでは、そこに教育のひとつの秘訣がある。」と述べておられる。教養演習のゼミ生たちは、「ギットン先生、ギットン先

生」と親しみを込めて呼び、ギットン教授の提供する問題を考え、話し合い、発表してくれた。晩年、とくに、若い人々に語りかけてこられた先生はこの本を「イレヌ」という若い女性に宛てて書いておられるので、ゼミのこのような状況をお伝えすると、きっと喜ばれたことであろう。この書の根底にパスカルの『パンセ』がある。²⁾

...だから、よく考えよう。それが道徳（生き方）の原理（始まり）なのだ。(L. 200)

リシャール・ストフェール教授 (Prof. Richard Stauffert, 国立高等研究院宗教部門 *Ecole Pratiques des Hautes Etudes*) はカルヴァンや宗教改革に関して講義された。その講義には、教授、研究者が大勢参加し、活発な討議がなされていた。

1967年9月、帰国すると、12月、学費値上げ反

2) ギットン先生は学ぶことを大切にされた。第2次世界大戦ではドイツ軍の捕虜となり、収容所に入れられた時、捕虜収容所の仲間に「このような時こそ学ぶ時だ。」と呼び掛けられ、講演会を組織された。軍隊には、いろいろな専門家、職業の人々がいるので、自らも加えて講師とし、一連の講演会を開催し、捕虜収容の期間を学びの時とした。シャルル・ベネール氏（建築家、フランス改革派教会、アノンシヤシオン教会会員）の証言。Cf. 森川甫著『フランス・プロテスタント 苦難と栄光の歩み』『あとがき』日本キリスト改革派教会西部中会、1999。



ポール・ロワイヤル・デ・シャン修道院（北から）17世紀当時

対闘争が起こり、翌年、1968年から紛争は次第に激化し、1970年、「東の東大安田講堂、西の関西学院大学第5別館」が全共闘と機動隊の激突の場となった。ストライキ、封鎖騒ぎの状況の最中、1969年メナール教授（パリ・ソルボンヌ大学）が来日し、大阪日仏センターで、ジャンセニスムについて講演され、久しぶりのアカデミックな雰囲気を感じた。³⁾

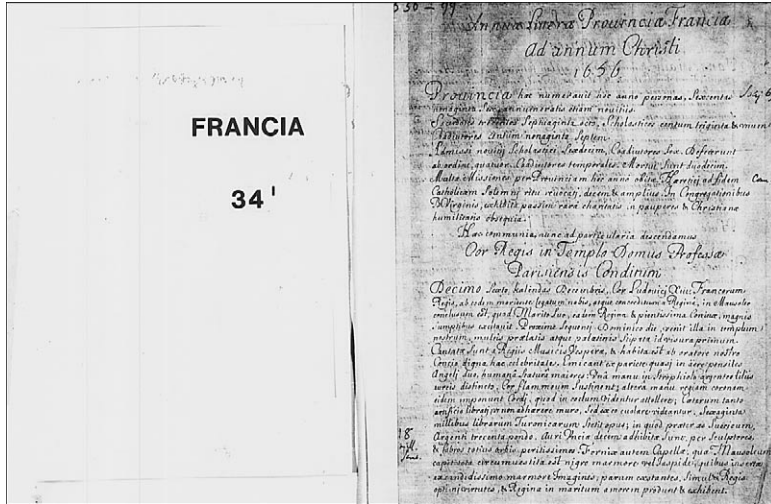
大学紛争後のカリキュラム改革を終え、紛争の火もほとんど収まった頃、博士論文完成のため、フランス政府からの招聘（広田昌義、現京都大学大学院教授とともに）を受けた。グイエ教授は退官されていたので、指導教授はメナール教授となり、題目も *Les Jésuites devant les Provinciales de Blaise Pascal.*（ブレーズ・パスカルの『プロヴァンシアル』に直面したジェズイット）となった。今回は完成して提出する決意で、Bibliothèque Nationale、(国立図書館)、Bibliothèque Mazarine（マザリーヌ図書館）などで鋭意研究をすすめた。1973年から1974年にかけてメナール教授 Prof. J. Mesnard、はユルム街の *Ecole Normale Supérieure*（高等師範学校）で、同教授の指導下に

あった学位論文提出候補者10名ほどのために *Séminaire sur les Provinciales* 『プロヴァンシアル』セミナーを10回、開いて下さった。その時、メナール教授は「『プロヴァンシアル』に関するフランスのイエズス会からのローマの本部への報告書の存在を問い合わせたところ、そのような文書は存在しない」との回答であったと話された。私はこの回答に疑問を持った。16世紀、イエズス会は日本から膨大な報告書を受けているし、東インド、西インドからも多くの報告書を受けている。フランスから報告がないはずがないと思った。この時から、ヴァチカンへ調べに行きたいという願いを持った。

1974年9月、オランダ、デン・ハーグで赤軍派によるフランス大使人質事件が起こった時、パリでは日本人が逮捕されたり、国外追放され、幾人もの研究者もフランスを急遽離れたが、緊迫した空気を感じながらも、研究に励んだ。パスカルに関する学位論文の執筆と共に、カルヴァン研究をリシャール・ストフェール教授のもとですすめ、同教授の著書、*Humanité de Calvin* (『人間カルヴァン』⁴⁾)を翻訳した。のちに、親交を深めるよ

3) Cf. SENGARI, 関西学院千刈セミナーハウス1990年3月20日, p. 48.

4) すぐ書房, 1976年, 宗教改革者カルヴァンの書簡を通して, カルヴァンの人物像を描いた優れた研究書とされ



「1656年度 フランス管区年次報告書」

うになったオリヴァエ・ミエ Olivier Millet, (現バーゼル大学教授、カルヴァン研究) とは、同じ講義に出席していた。

1975年、論文完成のため、フランス政府の給費が延長されたので、社会学部長に延長願いを出したところ、恩師、山中良知教授から、「社会学部教授会の決定はフランス政府の決定に優先する。」という帰国命令の手紙を受け取り、ついで、学部長から「1975年4月より学生主任に任命する」との通知を受け取った。この時、第2次大学紛争が始まっており、不本意な私は遅れて4月10日に帰国し、学部事務室へ行くと、早速、鉄パイプを持ったヘルメット、覆面姿の闘集団から、挨拶を受けた。この時は鉄パイプで事務室の扉を叩いて過ぎ去った。この時の紛争は、差別問題を巡ってのものであった。パリでの論文執筆とは、全く異なった生活が始まり、博士論文執筆はこうして中断せざるをえなかった。学生主任、教務主任などを続けたのち、学院の企画、広報委員、院長補佐として、関西学院の将来構想にかかわった。紛争の余塵が残り、まだ、他の大学がほとんど着手していなかった段階で、新学部創設の調査、計画を行なった。国際文化、情報科学、芸術の3学部の開設が計画された。ゼミ、研修会、国内外の学会、生涯教育の場としてセミナーハウスが建設され、新しい時代の到来を告げるPR誌として『クレセント』誌が創刊された。

当時の関西学院の最高責任者、久山康理事長・院長は、国際交流時代を迎えて、職員の意識革命を図り、職員を単なる事務職員でなく、教育行政の専門職として養成しようとされ、その一つのプログラムとして、世界大学研修旅行を実施された。1979年と1982年、第1回には、60数名、第2回には、40数名、参加した。グループ別の研究会を1年間持ち、その後、モスクワからハイデルベルク、ジュネーヴ、パリ、オックスフォード、ハーバード、トロント、SMU、南カリフォルニア、UCLA、スタンフォードなどの諸大学を訪問し、そこで研修会を持ち、報告レポートを書き、それを公刊した。この研修会、研修旅行に長期留学経験の若手教員が配置された。私もその1員に加わったので、論文執筆はいよいよ遠くなっていった。しかし、毎年、ポール・ロワイヤル学会等に出席するよう心掛け、パリ、フランスに滞在して論文執筆の細い糸をつないでいた。

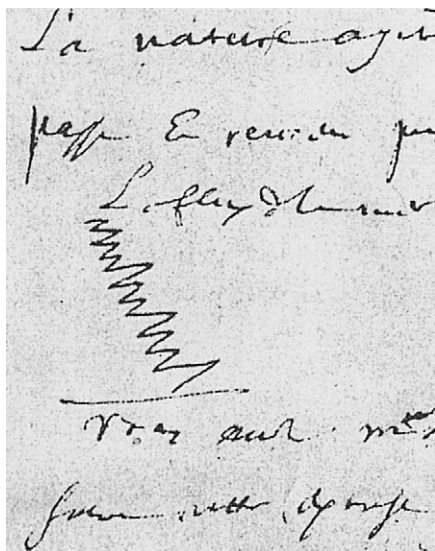
3) 「1656年度フランス管区年次報告書」

第2回研修旅行のさい、ヴァチカンを訪問した。その時、かつて上智大学の学長であり、その著書により、尊敬の念を覚えていたピタウ先生にお会いできるという光栄を得た。教皇庁を訪問し、教皇補佐、ジョゼフ・ピタウ神父によるミサを受けた。教皇庁の屋上でピタウ先生に近づくことが出来た時、私はおぼろげと「Archivum イエ

ている。(日本におけるカルヴァン研究の第一人者、渡辺信夫牧師の批評)

ズス会古文書館に入れて頂けないでしょうか。」とお伺いした。すると、先生はいつも簡単に、「できますよ。紹介しましょう。」と教えてくださいました。翌年の夏、ローマへ出掛けた。Padre Pitau という名を告げると、次々と扉が開かれた。女子修道院長は食事に招いて下さるし、古文書館の扉も開く。古文書館長 ラマル博士 Dottore Lamalle が応対して下さいました。フランスからの報告書を見せて下さいと言うと、怪訝な顔をされて、「日本からの報告書ではないのですか」と言われる。そして、「フランスからの報告書は存在しない」と答えられる。そこで、カタログを見せてもらうことにした。数字や記号で表記されているカタログを読んでいくと、F、Gと記され、数字で表されている文献があった。それはラテン語で書かれた手稿本であった。順次、読み進んでゆくと、Luthero, Calvini などの文字が私の目に飛び込んできた。フランス管区長のフランソワ・アンナ神父⁵⁾の筆跡ではなく、書記が筆記したものであった。「あった！」と思わず叫んだ。感激であった。ラマル館長にコピーをお願いすると、断わられた。マイクロ・フィルムも拒否された。閲覧と筆写は許可された。1週間、古文書館に通った。ラテン語の手稿本を書き写す作業はまことに愉快であった。夕方、古文書館を退出すると、街のリストランテに入った。夏の夕日を浴びて、イタリア人たちは陽気に語り合って食事していた。私は独りラルメ・クリスティヤキャンティ⁶⁾など、vino rosso のグラスを傾け、イタリア料理を楽しんだ。じんわりと湧いてくる喜びを味わった。

メナール教授に報告すると、教授は驚き、大変喜ばれ、解説のため、全面的な協力を約束して下さいました。ヴァカンス毎に、パリへ行き、メナール教授の指導を受けて解説していった。ある夏、ソルボンヌで午前中、メナール教授と作業し、サン



『パンセ』自筆原稿251

自然は〈往と還〉の進み方で動く。それは往っては戻り、ついでもっと遠くに行き、ついで2倍も少なく、ついで今までかつてなかったほど遠く行く、等々。原稿251, L. 771

・ジャック通りのレストランで昼食をとった。ステーキを食べ、先生の注いで下さった赤ぶどう酒 vin rouge を飲み、いい気分になって午後は宿舍 ロベール・ガリック館に戻って、昼寝をしようかなと思っていると、メナール先生はこれからサント・ジュヌヴィエーヴ図書館⁶⁾に行き、作業を進めようと言われた。支倉崇晴さん（現東京大学名誉教授、早稲田大学教授）の助太刀により、眠気を噛み殺しながら、何とか作業した。メナール先生の知的エネルギーはもちろんであるが、身体的エネルギーにも驚嘆を覚えたものであった。グイエ教授は退官後も数々の研究をすすめられておられたが、イエズス会の報告書の解説を大変喜ばれ、次はいつできるかと催促された。

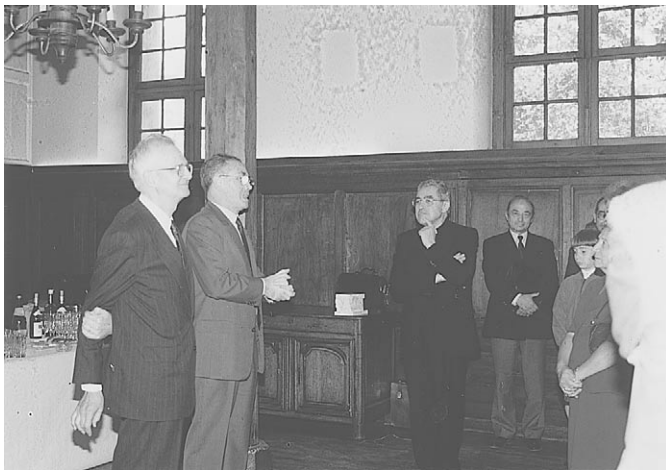
1980年代、学院は北摂キャンパス（現神戸三田キャンパス）に3学部を創設する構想を発表した。

5) Le R. P. François Annat (1590–1670) cf. 森川 甫『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」—ポール・ロワイヤル修道院』とイエズス会—関西学院大学研究叢書第95編, 2000年3月, 第2部第3章第2節「アンナ神父イエズス会の論争家(1)」, pp. 227–236.

6) かつて、サント・ジュヌヴィエーヴ学寮 Collège de Sainte-Geneviève があったが、大革命の時、取り壊された。現在は、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館が建ち、下記のことが外壁に記されている。15世紀末、エラスムスが学生として学び、16世紀初め、ここで教授として講義し、また、1520代後半には、のちのジュネーヴ宗教改革者ジャン・カルヴァンとフランス・ルネッサンスの代表的作家フランソワ・ラブレーが同時期に学び、その1, 2年後、反動宗教改革者イグナチウス・ド・ロヨラが学んだ学寮である。



1) 中央 リュスティジエ枢機郷



2) 「和解」の対話

左からジャン・メナール教授, フィリップ・セリエ教授
リュスティジエ枢機郷
撮影 筆者
Cliché par MORIKAWA Hajime

「和解のミサ」 ポール・ロワイヤル・ド・バリ 1990年9月

時代を拓く大きな事業は「10人のうち、7～8名の賛成の時はずでに遅い。2～3名の賛成のとき始めなければならない」ということで始めた。永井道雄元文部大臣、ライシャワー駐日大使、坂井時忠兵庫県知事、芦原義重関経連会長、前田陽一先生その他、外部の有識者、有力者の賛成は得たが、内部は猛反対、毎年、各学部と大学評議会が反対決議をした。そうした状況のなかで、1989年3月31日、兵庫県より土地購入契約をして、久山理事長・院長は退陣した。これで10年余、準備してきた新学部構想は消滅してしまった。一旦、失望落胆したが、心機一転、博士論文執筆へと向

かった。

進むこともあれば、退くこともある。(L. 27)

これより前、1988年、アジア、最初のポール・ロワイヤル学会が東京大学で開催され、関西では、関西学院、上ヶ原キャンパスと千刈セミナー・ハウスで開かれた。⁷⁾ 千刈でのパーティの席上、赤木教授から大阪大学に学位論文を提出してはどうかとお勧めを受けた。和田誠三郎先生の苦闘に満ちた学位論文、前田陽一先生の精緻、豊富な学位論文を知っている者として、私は日本では到底、論文提出の機会はないと思っていた。しか

7) Cf. *SENGARI*. 関西学院千刈セミナーはウス発行、1990年3月(原亨吉先生、また、田辺保教授が超多忙の中を最終校正して下さった。メナール教授、2編、セリエ教授1編、原教授1編など貴重な論文が掲載されている。現在も外国から照会がある。

し、日本では、最も提出し難い文学博士の学位論文に関しても、状況が少し変化してきたことを聞き、パスカル研究の伝統のある大阪大学に提出できればという気持ちになってきた。メナール教授に相談すると、大阪大学に提出後、パリ・ソルボンヌ大学に提出するよう勧めてくださった。

久山理事長・院長の退陣により、院長補佐の任は解かれたが、千刈セミナーハウス館長の任期がもう1年残っていたので、行事とともに、パスカル『パンセ』セミナーの報告書 *SENGARI* 出版の準備を進めた。1990年3月末から1年間、関西学院大学長期留学をさせてもらい、学位論文完成に全力を注いだ。パリで在外研究中の末松寿教授(九州大学)は銀杏をモンソーリ公園 Parc de Montsouris で拾ってもってきてくださった。1日、3～4時間の睡眠で論文完成を急いでいた。普通の食事を採ると、眠くなってしまうので、銀杏、ナッツで頑張った。ワープロに入力していて、画面上の線がゆがんでくると、ぶどう酒をぐっと飲んで暫く眠り、目がさめると、手帳を持って向いのモンソーリ公園へ行って、鴨の数をかぞえ、緑の樹木を眺めて目の疲れを癒し、論文について省察して、手帳にメモした。部屋に戻って再び、ワープロに入力、また線がゆがんでくるとぶどう酒を飲み、眠るという日々を繰り返して、やっと論文を完成し、1990年秋、大阪大学に提出し、1991年6月20日、学位授与式に臨んだ。⁸⁾

阪神大震災、その翌年の入院手術のため、学位論文の出版が遅れた。しかし、もうひとつ理由があった。「1656年度フランス管区年次報告書」の手稿本を解読、公刊し、抜き刷りをヴァチカンのイエズス会古文書館に送ったところ、同館長から受け取り感謝の言葉ののち、故ラマル館長がコピーとマイクロフィルムを送った記録はあるが、印刷は許可されていないとの手紙を受けとった。早速、手稿本 *manuscript* の印刷許可を求めたが、返事がなかった。再度、求めても返事がなかった。メナール教授は「返事がないのは、Ouiである」とおっしゃっていたが、許可をとらずに、出版するのは、気が進まなかった。そこで、昨年、2000年2月、「和解のミサ」(1990年9月、ポール

・ロワイヤル・ド・パリを、ノートルダム・ド・パリのリュスティエ枢機卿が訪問され、17世紀後半以来の決裂が修復された。)の写真⁹⁾を同封して、「1656年度フランス管区年次報告書」の印刷許可を求めた。すると、教皇ヨハネ・パウルス2世がユダヤ教とイスラーム教に赦しを求められた3月初旬、古文書館館長から許可の返事を頂いた。私が請求したのは、1656年度分だけであったが、私に与えられているすべての「報告書」などの公刊許可を与えて下さった。こうして、気掛かりなく、『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」—ポール・ロワイヤル修道院とイエズス会—』の出版(2000, 3. 関西学院大学出版会)をすることができたのであった。

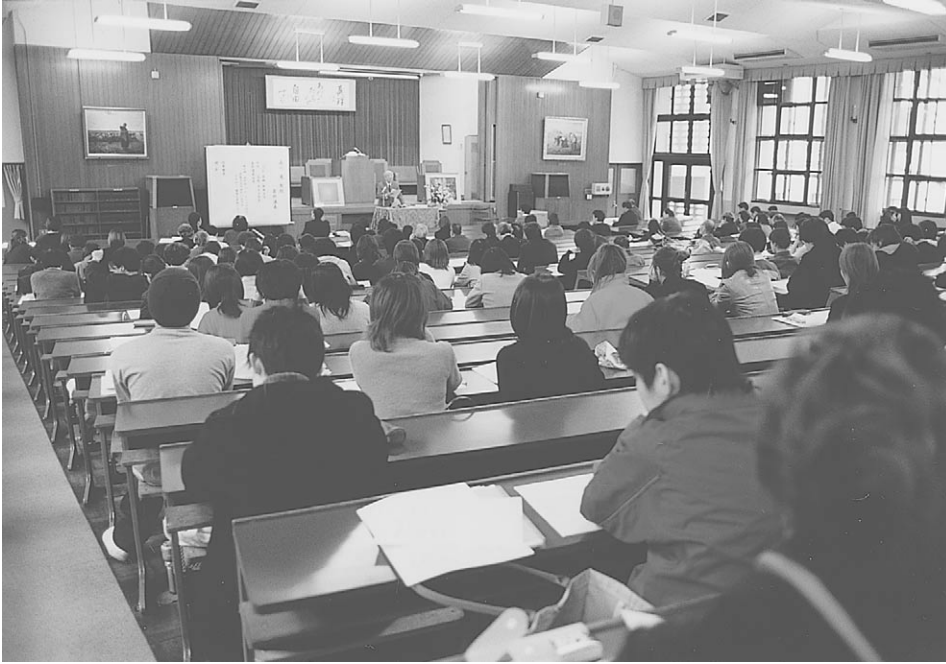
II. 宗教多元化時代とパスカル

1) パスカル研究

『パスカルの「プロヴァンシアルの手紙」—ポール・ロワイヤル修道院とイエズス会—』を公刊した時、同僚の春名純人教授は大阪大学文学部哲学第1講座の伊達四郎教授の言葉を引用して、「1人の思想家を深く掘り下げて研究することは、只単に1人の思想家を知ることではない。垂直に掘り下げるだけでなく、油層に当たるのだ。油層は水平に広がる。」と述べて、私の研究はそのような油層を掘り当てたのだと評して下さい、私のパスカル研究がカルヴァン研究、フランス・プロテスタント史研究、さらにまた、比較文化論研究に関連を持っていることを指摘して下さい。これは、私が密かに持っていた狙いであり、構想であった。1960年代の初期、道徳問題と恩寵問題を扱う『プロヴァンシアルの手紙』を博士論文の題目と決めた1つの大きな理由は、とくに、恩寵問題は、神の恩寵と人間の自由意志をとり上げるキリスト教2千年の根本問題であり、これを学ぶことにより、西欧精神文明の中心思想を把握しようとした。そして、その研究を学問交流の中心パリで、しかも、中世、創設以来のパリ大学の伝統を継承することを標榜するパリ・ソルボンヌ大学で研究することにした。私の能力不足のため、

8) (パスカル『プロヴァンシアルの手紙』(1991, 博士論文, 大阪大学)

9) Cf. 森川甫著『パスカル「プロヴァンシアルの手紙」—ポール・ロワイヤルとイエズス会—』「まえがき」



写真上 1) 後方から

写真下 2) 側面から

最終講義 2001年1月22日 社会学部2号教室

充分消化できなかったが、この狙いはある面では見事に的中し、第一流の学者、研究者の教えを受け、交流を持つことができた。『プロヴァンシア

ル』研究で、予想をはるかに越えて、長い年月を費やしたが、『プロヴァンシアル』につづいて、パスカルの第1の主著『パンセ』、つづいて、カ

ルヴァン、そして、最終講義の副題に示した「宗教多文化時代におけるアポロジー構築」を目指すことは、今後の課題であり、現代日本の精神的に混迷した状況に何らかの光をもたらすことができればと願っている。

2) 日本における『パンセ』

我が国に初めてパスカルのパンセを紹介したのは、植村正久『真理一斑』(明治17年)であろう。¹⁰⁾ 英訳本 *Thoughts* とアレクザンドル・ヴィネの *Etude sur Pascal* (『パスカル研究』) により、『真理一斑』を執筆し、多くの青年に読まれ、彼らの心を熱くしたといわれる。明治以来の我が国最大の哲学者、西田幾多郎は、アウグスティヌスに次いでパスカルを多く引用している。¹¹⁾ ハイデッガーに学んだ三木清は現象論の方法を用いて『パンセ』を研究した。¹²⁾ 本格的な研究では、前田陽一先生の研究がある。¹³⁾ 『パンセ』の最初的全訳者、由木康のキリスト論研究は簡単なものではあるが、パスカルの精神的本質を突いているのではないかと思う。¹⁴⁾ 森有正先生はジャン・ヴァール教授に学位論文提出を勧められていたとおっしゃっていたが、多忙のため、提出されなかった。方法論に関しては優れた著述もあり、また、御自身、その方法論を実行なさっていたように思

う。¹⁵⁾ 和田誠三郎先生は前述のごとく、ラフユマ版による護教論の研究を目指された。¹⁶⁾ 田辺保教授はパスカルの作品研究、多数の参考文献の研究を集積されて、学位論文『パスカルの世界像』を公刊され、また、『パスカル著作集』I～VII, 別巻I, II. (教文館) を独力で翻訳、注釈され、パスカルの思想の全貌を明らかにしようとした。¹⁷⁾ 中村雄二郎教授はパスカルとその時代の精神状況を『パスカルとその時代』によって解明されている。¹⁸⁾ 末松寿著『「パンセ」における声』の扱われているレトリックは今後、私も取り組みたい領域である。¹⁹⁾

3) アポロジーの構築目指して

現代は文明、宗教の接触、衝突の時代である。西谷啓治先生は禅とキリスト教をとりあげ、国際日本研究所で『正法眼蔵』を講義し、東西の哲学、宗教、文学を背景に精密、雄大な思索を深められ、毎回、数時間講義された。²⁰⁾ 武藤一雄先生 キリスト教の土着をキリスト教の立場から論じられた。²¹⁾ 蔵内数太先生は社会学部大学院において、ヨーロッパ、中国の社会論の日本における受容、儒学者とキリスト教宣教師との対話を講義された。²²⁾

私は日本の民俗宗教を通して、日本人の宗教へ

10) Cf. 拙論「フランス・キリスト教思想の植村正久への影響」関西学院大学「社会学部紀要」No. 20, 1971年3月。Cf. 『植村正久著作集』4 新教出版社, 1966年。

11) Cf. 拙論「西田哲学のパスカルへの共感」大阪大学フランス語フランス文学会 *GALLIA*, 1971年8月。

12) 『パスカルにおける人間の研究』岩波書店

13) 『モンテーニュとパスカルとの基督教辯證論』創元社, 1949年, 『パスカル「パンセ」注解』岩波書店第1, 1980年; 第2, 1985年; 第3, 1988年。

14) 境港出身。関西学院文学部英文科卒業後、神学塾で学び、東京二葉独立教会牧師となる。聖書研究キリスト教思想の研究によりマルクス主義と対決する。とくに、パスカルに多く学ぶ。讚美歌234番はこの思想対決をよく表現していると思う。

「3. 時代の風は 吹きたくりて、思想の波は あいうてども、すべての物を 超えてすすむ 主イエスの国は 永久に栄えん。」

15) 『パスカル』要書房 1955年。パスカルの方法論を論じている。

16) 『パスカル「パンセ」研究序説』青山社, 1985年。

17) 『パスカルの世界像』勁草書房, 1974年。

『パスカル著作集』全7巻, 別巻2冊。教文館 1980-1984年 など。

18) 『パスカルとその時代』岩波書店, 2000年, など。

19) 『「パンセ」における声』九州大学出版会, 1999年。

20) cf. 『西谷啓治全集』(第22巻第23巻, 1991年3月創文社) など。

21) 『神学的・宗教哲学的論集』創元社, 1980年, など。

22) 『社会学』培風館, 1962年, など。

の姿勢を把握するため、柳田国男、折口信夫の主張に注目し、日本の多くの人々、とりわけ、大多数の青年層が宗教的無関心であり、無宗教を表明している状況に注目したい。こうした「無宗教社会」に対するアプローチ、アポロジーの構築を試みる努力をしたい。

人々は宗教を軽蔑している。宗教を嫌い、宗教が真実であることを恐れている。(L. 12)

このように指摘して、パスカルは方法を『パンセ』第1章「秩序」で示している。すなわち、対話(L. 2ほか)、手紙(L. 4ほか)、詩編(賛美の歌)「全地にわたって歌われている詩編」(L. 1)である。対話による相互理解と説得であり、親しみ易い散文による主張であり、詩編は賛美の歌による表現であろう。既成の教会、修道院が衰退の傾向のあるなかで、正統的な聖書の教えを守り、しかも、多くの青年の集まってくる宗教共同体にテゼ²³⁾がある。犬養道子氏は「20世紀の奇跡」と呼び、教皇ヨハネ・パウルス2世は「テゼには春がある」と述べられている。

Laudate omnes gentes

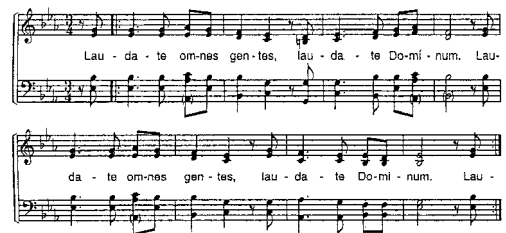
(すべてのひとよ、主をたたえよ。「テゼ讃美歌23番」)

結 び

「背後の思想」(L. 91)は春名寿章²⁴⁾、山中良知²⁵⁾、渡辺信夫²⁶⁾、フランソワ・ヴァンデル²⁷⁾、リシャール・ストフェール²⁸⁾、オリヴィエ・ミエ²⁹⁾ら師、先輩を通して教えられたカルヴァンの宗教思想、特に『キリスト教綱要』、そして、まず、第1篇「創造主なる神を認識することについて」第1章「神を知る知識と人間を知る知識が結び合っていること」であり、パスカルのアポロジー最初の章「順序」にある「...宗教を尊ぶ心を起こさせなければならない。」(L. 12, B. 187)が、モデルとなるであろう。

「真理はあなたを自由にする。」³⁰⁾ (『ヨハネ』VIII, 32) 真理とはイエスの愛の教えであろう。Mastery for service. の根底にある「真理」でもある。この真理が「背後の思想」の中核をなくしている。

Laudate omnes gentes



23) Cf. 森川 甫「テゼ 新しい創造力の鼓動が世界の若者が集まってくる 出会いと和解の丘—宗教と芸術の総合—『クレセント』Vol. 2, No. 2, 1978 テゼ共同体は1940年, Fr. Rogerによって始められた. Frère. Eric, は初期から参加した画家であり, 最終講義のとき, 掲げた彼の2作品, Viens Saint Esprit (来れ, 聖霊)と Psaume (詩編)は1975年, 日本に入った. エリック修道士の作品としては, アジアに入った最初のものである. 後者「詩編」はソーヌ河の沼を描いたもので, 神の創造の美, 豊かさの賛美を表している. Frère. Roger (ロジェ修道院長は, かつて「愛である主はあなたに心の平安を与えられる」という言葉を筆者に下さったが, この言葉はテゼの精神をよく表していると思う.

24) 『ウエストミンスター小教理問答講解』, 聖恵授産所 上 1977年, 下 1978年.

25) 『理性と信仰』創文社 1964年.

26) 『カルヴァンの教会論』改革社, 1976年6月, カルヴァン『キリスト教綱要』新教出版社, 全4巻1962年~1965年, 翻訳など.

27) François WENDEL, Calvin, source et évolution de sa pensée religieuse, Paris 1950.

28) Richard STAUFFERT, "Creator et Rector Mundi Dieu, la création et la providence dans l'œuvre homélique de Calvin, Lille, 1978.

29) Olivier MILLET, Calvin et la dynamique de la parole, Etude de rhétorique réformée, Champion, 1992.

30) 関西学院大学社会学部開設の聖書の言葉であり、学部正面玄関わきに刻まれており、また、チャペル(2号教室)には、酒井素心先生揮毫による書が掲げられている。これは前社会学部宗教主事、現東京女子大学長、船本弘毅氏の社会学部宗教教育への寄付の御厚志を生かすために宗教教育委員会が選んだものである。

版画 p. 12, p. 14 は, ポール・ロワイヤル図書館 (パリ) 所蔵.

Blaise Pascal, mon Maître et mon Ami —Vers une Apologie à l'intention des Jeunes indifférents à la Religion*—

MORIKAWA Hajime

RÉSUMÉ

Blaise Pascal qui m'avait amené à la foi chrétienne en 1948, trois ans après la Deuxième Grande Guerre mondiale, m'a conduit dans la vie intellectuelle et académique; j'ai écrit mon mémoire de licence: < Pascal-son idée de la foi dans le discours du pari > (Université des Langues Etrangères d'Osaka, 1958) et < Etude sur l'Histoire du Salut dans les *Pensées* de Pascal > (Université d'Osaka, 1962). Invité par le Gouvernement Français et envoyé par la préfecture de Hyogo et notre Université, j'ai eu l'heureuse occasion de faire mes études sur Pascal en vue du Doctorat sous la direction du Professeur Henri Gouhier (Université de Paris, Académie Française) et ensuite sous celle du Professeur Jean Mesnard (Université de Paris-Sorbonne, Académie Française) Le titre de ma thèse, que j'ai écrite sous la direction du Professeur Henri Gouhier est < L'histoire des *Provinciales* et la pensée théologique de Blaise Pascal, de Port-Royal et des jésuites. >, et avec le Professeur Jean Mesnard < Les Jésuites devant les *Provinciales* de Blaise Pascal >. J'ai découvert le rapport officiel du Province de France de la Société de Jésus, que les chercheurs pascaliens ne connaissaient pas au moins en France: *Annuae Litterae Prouvinciae Francia ad annum christi 1656*. Mon heureuse découverte a été rendue possible grâce aux faveurs et à des coopérations importantes, comme celle du Cardinal Joseph Pitau et du Professeur Jean Mesnard. J'ai présenté ma thèse de Doctorat à l'Université d'Osaka, une des "deux écoles pascaliennes au Japon" (J. Mesnard). J'ai fait publier cette thèse sous le titre: *Les Provinciales* de Blaise Pascal —L'Abbaye de Port-Royal et la Société de Jésus—.

Par les études pascaliennes, j'ai essayé aussi de comprendre le christianisme dans la civilisation européenne depuis l'Ancien et le Nouveau Testaments. Jusqu'ici au Japon, les études des comparaisons entre le christianisme et le bouddhisme, surtout le zen, et celui et le confucianisme ont été faites. Et maintenant, j'ai l'espoir de tenter des recherches pour établir une apologie chrétienne, à la manière pascalienne: le dialogue, l'art de persuader et sa rhétorique, dans notre pays, parmi les gens qui sont souvent indifférents à la religion, aujourd'hui nombreux, surtout parmi les jeunes gens.

* Mots clefs: Pascal, *Les Provinciales* et *Pensees*, apologie.